

主 題：神が喜ばれること

聖書箇所：ルカの福音書 15章11-32節

「わたしの証人となります。」、死からよみがえられた主イエス・キリストが最後に弟子たちにお語りになったことは宣教に関することでした。使徒の働き1：8「しかし、**聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。**」。このことばは宣教へのチャレンジということができると思います。「出て行きなさい、わたしの証人として出て行きなさい。」と。今日この時間は、皆さんとごいっしょに普段の学びから離れて、宣教の働きの大切さについて考え、みことばを見て行きたいと思います。私たちににとって宣教がどれ程大切か、主はそのことを私たちに教えてくれます。

今日のテキストはルカの福音書15章です。ここでイエスは三つの話をなさいました。皆さんよくご存じだと思います。まず最初に、彼は「いなくなった羊」についての話をしました。いなくなった一匹の羊の話、また、その後で「なくなった一枚の銀貨」の話、そして最後に、「いなくなった息子」の話です。このことは皆さんよくご存じなのですが、イエスはなぜこのような話を為さったのでしょうか？いなくなった一匹の羊のことを、なくなった一枚の銀貨のこと、そして、いなくなってしまった一人の息子の話を為さったのでしょうか？その答えはこのルカの福音書15章が明らかにしてくれます。1-2節を見ると、「さて、**取税人、罪人たちがみな、イエスの話を聞こうとして、みもとに近寄って来た。:2すると、パリサイ人、律法学者たちは、つぶやいてこう言った。「この人は、罪人たちを受け入れて、食事までいっしょにする。」**とあります。これが原因だったのです。パリサイ人や律法学者たちはイエス・キリストが彼らが罪人と呼んでいる連中を呼んで、交わり、いっしょに食事をしている様子を見て不満をつぶやいたのです。この当時のことを私たちはもう少し知っておくことが必要です。なぜ、イエスはこのような話を為さったのでしょうか？パークレーは非常に面白い背景を教えてください。当時のパリサイ人、また、律法学者と罪人と呼ばれる人々との関係は、このような関係だったと言います。「パリサイ人は律法を守らない人々を地の民、この地上の民と呼んで、彼らと取引をすることや売買をすることが禁じられていました。それは、彼らがこの様な人々と交わることによって自分が汚れると考えたからです。そこで狭隘（心が狭い）なユダヤ人たちは、罪人が一人でも悔い改めるなら天に喜びがあるという代わりに、罪人が一人でも神の御前で抹殺されるなら天に喜びがあるとまで言い切っていたのです。」と。すなわち、彼らは罪人の救いを求めるよりも、彼らの滅びを求めていた、そういう社会だったのです。そのようなことをイエスは十分知った上で、この様につぶやいているパリサイ人や律法学者たちにこのような三つの話をなさせて、彼らに大切なことを教えようとするのです。というのは、彼らは自分たちは主の教えに対して熱心であること、また、自分たちは霊的であると自負していたからです。自分たちこそが神の前に喜ばれている者であると、そのような確信を持っていました。そこでイエスは、実は、彼らは本当のところ主に喜ばれていないのだということを、この三つの話をもって明らかにされたのです。彼らの間違いを明らかにするだけでなく、同時に、主なる神のお心というもの、それも明らかにされているのです。つまり、主なる神がいったい何を望んでおられるのか、主なる神はいったい何を喜ばれるのか、そのことを明らかにされたのです。

今日、私たちが見たいのは15章の11節から、「いなくなった息子」の話です。一般的には「放蕩息子」と呼ばれている所です。「放蕩息子」、自分の思いのままに振るまい、特に、酒とか女遊びにふけることと辞書は定義しますが、まさに、そのような生き方をしていた一人の息子の話です。11-32節まで、余り難しい話ではありません。最初に、次男のこと、つまり、この放蕩息子の話があって、その次に、父のことがあって、最後に長男のことが記されています。そして、言えることは、この放蕩に走った次男も（最後には変わるのですが）、そして、長男も、実のところ、父に喜ばれることをしなかったことを教えているということです。この話を通して、主は人の救いに関して、また、別の言い方をすれば、罪人の救いに関して主がどのような思いを持っておられるのかということをはっきりとされたのです。

☆神が喜ばれること

A. 弟の選択 11-19節

まずこの弟の方から見て行きましょう。彼が選択したことをひと言で言うなら、自分の好きなように生きるという選択です。その選択で彼は生きていたのです。六つの選択をここに見ることができます。自分勝手な五つの選択と、最後には正しい選択をしたことです。

1. 身代を要求した

1 1 節から見ましょう。「またこう話された。「ある人に息子がふたりあった。:12 弟が父に、『おとうさん。私に財産の分け前を下さい。』と言った。それで父は、身代をふたりに分けてやった。」

まず最初に、この息子が父に言ったことは「私の取り分をください。身代を早く分けてください。」ということでした。財産分与に関しては、モーセが申命記 2 1 章の中で教えています。2 1 : 1 7 「**きらわれている妻の子を長子として認め、自分の全財産の中から、二倍の分け前を彼に与えなければならない。彼は、その人の力の初めであるから、長子の権利は、彼のものである。**」。長子は二倍の分け前を受けるのです。つまり、この状況に当てはめるなら、父親の財産の三分の二は長男に行き、三分の一は弟のところに行きます。だから、弟の二倍のものを受けると言うのです。普通、このように身代を求めるのは父が亡くなってからのことです。もちろん、ある人々は、いやこのようなことは実際に起ったことであると言います。でも、少なくとも、私たちがこのみことばを見て確信することは、この弟が父親がまだ元気なうちに「お父さん、私の分け前をください。」と言った事実です。そのような息子のことばを聞いた父がどのような思いを抱いたか、はっきり言えることは大変悲しかったということです。この息子にとっては父がどう思うかなどは関係なかった。彼が考えたのは自分のことです。これから私は旅立って行きたいと、これが 2 番目の選択になるのですが、その選択をするためには軍資金がいる、だから、「お父さん早く私の取り分をください。」と身代を要求するのです。

2. 旅立った

1 3 a 節「**それから、幾日もたたぬうちに、弟は、何もかもまとめて遠い国に旅立った。**」、彼はきっと思ったのでしょ。ここにいるよりもあの町に出て行ったら、あの国に出て行ったら私には幸せが待っている、自分の思い通りにさえ生きるなら、きっと私の心は満たされるに違いないと。私たちもそのような思いを持って生きて来ました。隣の芝生を見て、その方が青かったとか、どこかに私の心を満たしてくれるもの、どこかに本当の幸せがあるに違いないと、神以外のところにそのような幸せを求めて来た私たちです。彼もそうでした。父親の元にいるより出て行く方が良いと、旅立って行くのです。

3. 放蕩をする

1 3 b 節「**そして、そこで放蕩して湯水のように財産を使ってしまった。**」、彼はその金を何に使ったのか？彼のお兄さんがそのことを教えてくれます。3 0 節に「**遊女におぼれてあなたの身代を食いつぶして**」とあります。少なくとも、そのように遊女におぼれていたのです。そのことを見て取ることができます。いずれにしてもこの次男は自分の取り分を取ってそれを好きなように使おうとしたのです。

4. 仕事をする

1 4 - 1 5 節「**何もかも使い果たしたあとで、その国に大ききんが起こり、彼は食べるにも困り始めた。:15 それで、その国のある人のもとに身を寄せたところ、**」、つまり、彼は仕事をし始めるのです。「**ある人のところに身を寄せる**」とはそういうことです。食べ物がないから生活して行かなければならない、そのためには仕事をしなければならないのです。

5. 豚の世話をする

1 5 - 1 6 節「**その人は彼を畑にやって、豚の世話をさせた。:16 彼は豚の食べるいなご豆で腹を満たしたいほどであったが、だれひとり彼に与えようとはしなかった。**」、豚の世話をするという事は律法に反することでした。律法の中には、申命記 1 4 : 8 に記されていますが、確かに、豚は汚れていると教えられています。「**豚もそうである。ひづめは分かれているが、反芻しないから、あなたがたには汚れたものである。その肉を食べてはならない。またその死体にも触れてはならない。**」、また、後にユダヤ人たちが作った律法の中では、豚を飼う者はのろわれると、そのような教えまでも出て来たほどです。ですから、彼の為した選択は、背に腹は代えられぬかもしれないけれど、明らかに神の前に間違った選択でした。豚の世話をすることも、そして、何とその豚のえさを食べたいと思うこと、もちろん、理解できます。大変ひもじかったのでしょ。しかし、彼はそこまで落ちて行ったのです。

6. 父のところに帰る

もう一つ、彼の為した選択は最後に出て来ます。それは父のところに帰ろうとする選択です。

1) 我に返った

1 7 節「**しかし、我に返ったとき彼は、こう言った。…**」、このことばは「正気に戻る」という意味です。ハッとして今まで自分のして来たことに気付いたのです。「**いったい、自分は何をしているのだろう、私は何をして来たのだろう**」と、そのように「**我に返る**」ことです。この表現はユダヤ人たちの間では「悔い改めの意味を持っている」と言われます。確かに、この後見て行くと、この息子が神の前に悔い改めていることが分かります。というのは、彼は自分の態度を改めようとしています。自分の歩みを改めようとしています。

どのようにしてそれが起って来たのでしょ？みことばが私たちに教えていることは、まず最初に彼がしたことです。彼が「**我に返ったとき**」彼はこのように言います。『**父のところには、パンのあり余ってい**

る雇い人が大ぜいいるではないか。それなのに、私はここで、飢え死にしそうだ。』、彼はあわれみ深い父のことを思い出すのです。

2) 自分の罪深さに気付く

そしてその後、18-19節「**立って、父のところに行って、こう言おう。「おとうさん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。:19 もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。雇い人のひとりにしてください。」**」、自分の罪深さに気付いています。自分の父親がどんなにすばらしいあわれみに満ちた存在であるかということに覚えただけでなく、自分がどれ程その父に対して、また、神に対して罪を犯したかということに彼は悟るのです。

3) 父親のところに戻る

そして彼は、20節に「**こうして彼は立ち上がって、自分の父のもとに行った。**」とあります。実際に父親のところに戻ろうとしたのです。だから「悔い改め」なのです。こうした方が良いと考えるだけではないのです。自分の過ちに気付いたときに、正しいことをしようと考えただけでなく、実際に行動に出るのです。ですから、この彼の行動を見た時に、あわれみ深い父を思い出し、自分の過ちに気づき、そして、自分の父のところに戻ろうと決心して、その方向に向かって歩み始めて行くのです。まさに、悔い改めの姿を私たちはここに見るのです。

「私の父はあわれみ深い方だ。私のお父さんはあわれみに満ちあふれた方だ」と。なぜ、彼はそのことが分かったのでしょうか？17節を見てください。「**『父のところには、パンのあり余っている雇い人が大ぜいいるではないか。』**」とこのように記されています。というのは、この息子は自分の父親が雇い人をどのように扱っていたかを見ていたのです。今、私たちがこれを読んで別に不思議には思わないかもしれませんが、でも、この雇い人とは「日雇い」という意味です。長い間の契約を結んでいるではありません。日雇いなのです。私も日雇いの仕事をしたことがあります。その日に行って仕事を与えられたらその日の終わりに日当をもらう、そういう働きです。この当時、この様な日雇いの仕事をしている人々は最も貧しい人々であり、人々から最も見下されていた人たちです。そのような社会的に人々から見下されているような人々に対しても、父親はあり余るほどの食べ物を与えていたのです。偏見を持って見ていなかったのです。もちろん、食べ物をそれほど惜しげなく与えるということは、この父親は決められた賃金をこの人々に支払っていたのでしょうか。確かに、その教えはレビ記に出て来ます。レビ記19:13「**あなたの隣人をしいたげてはならない。かすめてはならない。日雇人の賃金を朝まで、あなたのもとにとどめていてはならない。**」と、その通り実践していたのでしょうか。だから、賃金を払うだけでない、この人たちに十分な食べ物を与えていたことを彼は見ていたのです。でも、そのことに気付くまでに時間がかかりました。

私たちが毎日の生活の中でその目先の大変なことだけに捉われていると、何が正しいことか冷静に考えないし、判断もできません。後になって、時間が経ってから、なんだこうすれば良かったとか、あれは間違っていたと気付きます。その真最中には、私たちは冷静に判断することができないのです。この息子も彼の心に中にはあの国に行けば、この家を出て行けば、好きな生活ができたなら、好き勝手なことをしたら、きっと私の心は満たされるに違いないと思って、一生懸命そのことを夢見ていました。早く出て行きたいと実際に出て行った。「さあ、自分の好きなことができる、金もある。」と、何が正しいかなどは考えもしなかったのです。しかし、そのうちにその金もすべて無くなるし、しかも、大飢饉が襲った。そのときに自分の過ちに見覚めるのです。神のなさることに偶然はありません。いろいろなことを通して、罪人が自分の罪に目覚めて、救いを求めて主の前に求めて出て行くように、その機会を神は作ってくださるのです。恐らく、皆さんもそのようなことを経験されたかもしれません。

しかし、少なくとも私たちが言えることは、この息子が自分の父親がどんなにあわれみ深い存在であるかということにこの時に思い出すのです。「**我に返った**」時、「**いったい自分はここで何をしているのだろう、豚のえさを食べたいとジーと見ている自分を見つめて、何をしているのだ、お前は。もうこんな生き方は止めよう。**」と、そして、彼はそのことに気付いて正しいことをしよう悔い改めるのです。見て分かるように、彼自身がこの18-19節で言っていることには、何一つとしてそこに自分自身の罪の言い訳も、責任転換も見られません。「**立って、父のところに行って、こう言おう。「おとうさん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。:19 もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。雇い人のひとりにしてください。」**」。「私はそんなふうには生きてくなかったけれど、だれだれが誘惑したから」などとは言っていません。彼は「自分が間違った選択をしたのだ」と、そのことに気付いてそこから立ち返ろうとするのです。本当の悔い改めです。

この罪深さに関して、彼はこう言いました。「**私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。**」と、普通なら、私たちは「お父さん、私は間違っていました。あなたに大変なことをしてしまいました。あなたを悲しませることをしてしまいました。どうぞ赦してください。」と、それで終わるかもしれません。し

かし、この息子はそうではなかったのです。「私は天に対して罪を犯した」と言いました。「天」というと二つのことが考えられます。一つは「神のおられるところ」で、私は神に対して罪を犯したということです。恐らく、多くの皆さんはそのように解釈されます。確かに、その通りです。私たちの罪はだれか人に対して為す罪であり、同時に、神に対する罪です。なぜなら、私たちは神がしてはならないことをするからです。罪というのは、神がしてはならないということをするのであり、また、神がしなさいと言われることをしないことです。いずれにしろ、罪は神に逆らうことです。ですから、彼は自分の生き方を見た時に、私は神の前に正しくない、だから、神の前に罪を犯した、天に対して罪を犯したと言うのです。もう一つ言えることは、非常に面白いのは、ここで使われている原語をそのまま訳すと「天の中に」へと訳せるのです。どういう意味かということ、恐らく、自分の犯して来た罪が余りにも多くて、天に届くほどだということです。彼の中にはそのような意味もあったのかもしれませんが。そのような表現をここで使っています。つまり、彼は自分がどれ程数々の罪を犯して来たのか、自分の犯した罪がどれ程大きいのか、神のあわれみによってそのことを悟ったゆえに、私は天の中に入るほどのたくさんの罪を犯して来た、地上で積み上げられて行ったその罪がどんどん高くなって天に至ると言うのです。まさに、パウロがローマ人への手紙2：5で教えたことを私たちはここに見るのです。「ところが、あなたは、かたくなさと悔い改めのない心のゆえに、御怒りの日、すなわち、神の正しいさばきの現われる日の御怒りを自分のために積み上げているのです。」と、この息子は自分の罪深さに気付いたのです。「私はどうしようもない汚れに汚れた罪人だ」と、神はそうにして私たちに私たちの本当の姿を示してくださるのです。

思い出しませんか？ 祈るために宮に上った取税人のことです。ルカ18：13「ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま、こんな罪人の私をあわれんでください。』」。私たちが忘れてはならないのはこの心です。神が私たちのうちに働かれるとき、自らの罪深さに気付かされます。そのことに気付いた私たちは「神さま、私は何をしてもあなたを喜ばせることはできません。どんなに喜ばせようと頑張っても、頑張っても、あなたの前にしていることはそれと逆のことばかりです。あなたを悲しませることの連続であり、あなたの御名を汚すことの連続であり、私はもうどうしようもない者です。このような私があなたの前に罪を赦してくださいと言うこと自体がおこがましい。でも、もし神さま、赦していただけるならあわれみを示してください。赦されなくても当然です。仕方がありません。」と、まさに、これがこの息子が考えたことでした。お父さんのところに行ってこのように言おうと言います。19節「もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。雇い人のひとりにしてください。』」、息子として扱ってくださいなどは到底言えないと。私はこれほど父の前に罪を犯したのだから、一番身分の低い、人々から蔑まれている日雇いのひとりにしてほしいと言うのです。息子としての権利など主張できない。拒否されることも可能です。父親からあなたなんかいらないと拒絶されることも可能なのです。しかし、もし赦されるのなら雇い人のひとりにしてほしいと。神に何かを要求しているではありません。ただ、神のあわれみを求めているのです。

彼は確かに、未だイエスの十字架を知りませんでした。イエスが十字架上でなくなった後、私たちにはこの十字架に救いの希望があります。私たちはただ神にあわれみを求めるものではありません。同時に、神が私たち罪人のために備えてくださった救いを心から喜んで受け入れるのです。ただ「神さま、私をあわれんでください。」と祈って私たちは救いに至るものではありません。確かに示されたあわれみ、イエス・キリストの十字架を覚えて、「神さま、こんな私のためにこのようなすばらしい救いを備えてくださったことを感謝し、私はあなたを信じてあなたに従って行きます。」と言うのです。でも、私たちが忘れてはならないのは、イエスの十字架の前であろうと後であろうと、まさにこの心です。神の前にあわれみを求めるという心です。なぜなら、その心は、先ほども話したように、自分の罪深さに気付くことだけでなく、自分では自分を救うことができないことを悟るからです。だから、神にあわれみを求めるのです。自分で救えると思っているなら神のあわれみなど必要ないからです、「自分で頑張ります」と言います。でも、自分で自分を救うことができないと分かっている人は、「神さま、私にはどうにもなりません。自分で自分をどうすることもできません。あなたの助けが必要です。あなたのあわれみが必要です。」と、私たちに必要なことはこのような「心」です。

覚えておられますか？ ジョン・ニュートンが「アメイジング・グレイス」を書いたときに、その歌詞の中に「このような哀れな者を救ってくださった。このように卑劣な者、このような悲惨な者です。どうすることもできない、救われる資格の全くのないこのような私を救ってくださった。」と、彼はしっかりそのことを覚えていたのです。自分を正しく見ていました。神の前に罪に罪を重ねている自分、汚れに汚れた自分、自分で自分を救うことのできない自分。救いに関して全く希望のない自分、その自分に気付いたときに、そんな自分を愛して救ってくださる神を見上げて「神さま、感謝します。こんな私を愛して、こんな私にこんなすばらしい救いをくださったことを感謝します。」と。私たちはみなそのことに

気付くことが必要なのです。この息子が気付いたように。「あなたに対して罪を犯した、あなたの子と呼ばれる資格は私にはもうない。」と。エズラが9章の中でこのように言っています。9：6「私の神よ。私は恥を受け、私の神であるあなたに向かって顔を上げるのも恥ずかしく思います。私たちの咎は私たちの頭より高く増し加わり、私たちの罪過は大きく天にまで達したからです。」と、自分の罪深さに気付いたとき、同時に、私たちの神の聖さ正しさ偉大さに私たちが触れたとき、私たちは神の前に顔を向けることができないのです。皆さん、なぜ、神のことを知ることが必要なのでしょうか？神を知ることによって私たちは自分を正しく知るからです。自分がどれ程、神の前に罪深い者であるかということを知るからです。神の恵みによって救われた一人ひとは、神の恵みによって本当の自分を知らされ、そのような自分に救いを備えてくださったすばらしい救い主に救いを求めて出て行くのです。この息子がしたように、自分の罪深さに気付く、その罪深い間違った生き方を止めて正しい生き方をしようと神の前に決心して、そのような歩みを始めるのです。まさに、悔い改めをもって彼は救いに至るのです。これも彼の選択であり、彼が為した正しい選択でした。

B. 父の選択 20-24節

このような息子の選択に対して父はどのようなことをしたのでしょうか？この次男の為した選択の初めは自分のことしか考えていませんでした。どのようにして自分を楽ませるか自分のことばかり考えていました。ところが、父親の選択は自分のことではなくこの息子のことを考えています。ここに七つの選択があります。

1. 息子を見つけた

20節「ところが、まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけ、」と言います。自分の家に戻ろうとする息子をまだ遠かったのに見つけたということは、明らかに、父親はこの息子が帰って来るのを待っていたのです。

2. かわいそうに思った

父親は常にあわれみをもって息子に接しています。イエスを信じていないあなたに対しても神はあわれみをもっておられるのです。なぜなら、あなたのために救いを備えてくださっているからです。私たちクリスチャンに対しても神はあわれみをもってくださっています。どのような罪でも私たちが主の前に告白するなら赦してくださる、何度でも…。

3. 走り寄って抱き口づけした

20節「走り寄って彼を抱き、口づけした」、つまり、受け入れられた、赦されたということです。どんな時でも父は赦してくださるのです。

4. 一番良い着物を着せる

22節『急いで一番良い着物を持って来て、この子に着せなさい。』と、バークレーはこの一番良い着物を着せるというのは「榮譽」を現わしていると言います。

5. 指輪をはめさせた

22節「手に指輪をはめさせ、」、指輪をはめさせるということは「権威を現わす」のです。つまり、このようなことを通して、神に逆らい父に逆らっていた息子が、もう一度息子として父に迎え入れられる、その様子を現わしているのです。

6. 足にくつをはかせる

22節「足にくつをはかせなさい。」、恐らく、この息子は帰って来た時にくつをはいていなかったのでしょう。というのは、くつをはかないのは奴隷だからです。そして、人にくつをはかせるというのは自由人であることを意味したのです。もう一度、奴隷としてではなく自由人として迎えるというのです。

7. 肥えた子牛をほふる

23-24節「そして肥えた子牛を引いて来てほふりなさい。食べて祝おうではないか。：24 この息子は、死んでいたのが生き返り、いなくなっていたのが見つかったのだから。』そして彼らは祝宴を始めた。」、肥えた子牛をほふるというのは特別な喜びのことです。なぜ喜んだのでしょうか？死んでいた息子が生き返ったからです。この次男の告白が21節に出っていますが、よく見ると、息子はこのように言っています。『おとうさん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。』、彼は言おうと決心していたそのことばのすべてを言いませんでした。途中で切れているではないですか（19節と比較して）？22節に「ところが父親は、」と続きます。恐らく、父親はここまで聞いてもう十分だと思ったのです。なぜなら、この息子は心から自分の罪を悔い改めていることが分かったからです。ですから、息子が言い続けようとしているのに、父親はしもべたちに命じて「早く、一番良い着物を持って来なさい。指輪をはめさせなさい。くつをはかせなさい。この子はもう赦された。私はこの子を歓迎する。」と、まさに、これは罪人に対する神の態度です。

イザヤ55：7を見てください。「悪者はおのれの道を捨て、不法者はおのれのはかりごとを捨て去れ。主に

帰れ。そうすれば、主はあわれんでくださる。私たちの神に帰れ。豊かに赦してくくださるから。」、主はあわれみをもって私たちを赦してくれる、主のところに立ち帰れと、そのような神だったのです。罪を赦してくくださるあわれみに満ち溢れているお方です。このような父親の態度をイエスはパリサイ人たちに教えるのです。

C. 長男の選択

25節からそのことが記されています。25-32節「ところで、兄息子は畑にいたが、帰って来て家に近づくと、音楽や踊りの音が聞こえて来た。それで、:26 しもべのひとりと呼んで、これはいったい何事かと尋ねると、:27 しもべは言った。『弟さんがお帰りになったのです。無事な姿をお迎えしたというので、おとうさんが、肥えた子牛をほふらせなされたのです。』:28 すると、兄はおこって、家にはいろいろともしなかった。それで、父が出て来て、いろいろなだめてみた。:29 しかし兄は父にこう言った。『ご覧なさい。長年の間、私はおとうさんに仕え、戒めを破ったことは一度もありません。その私には、友だちと楽しめと言って、子山羊一匹下さったことはありません。:30 それなのに、遊女におぼれてあなたの身代を食いつぶして帰って来たこのあなたの息子のためには、肥えた子牛をほふらせなされたのですか。』:31 父は彼に言った。『おまえはいつも私といっしょにいる。私のものは、全部おまえのものだ。:32 だがおまえの弟は、死んでいたのが生き返って来たのだ。いなくなっていたのが見つかったのだから、楽しんで喜ぶのは当然ではないか。』」

長男の選択は、この父の喜びを理解しなかつただけでなく、却って、父に対して怒りを覚えています。長男はこの日どこにいたのでしょうか？25節には「兄息子は畑にいたが、」と書かれています。彼はしっかり自分が為すべき務めを果たしていたのです。畑に出て行ってそこで彼がしなければいけない仕事をしていました。父のために働いていたのです。しかし、弟が帰って来て、その弟をこのように歓待している父の姿を見て、彼は怒りを覚えました。そのことがたくさん記されています。まず、「家にはいろいろともしなかった。」、そして、この弟のことを「弟」とは言いませんでした。「あなたの息子」と呼んでいます(30節)。つまり、この長男は今自分が見ているこの出来事に対して、父親が息子を赦したという事実に対して、それを喜んでいなかったのです。先ほども言ったように、でも、彼はやるべきことをしていました。畑に出て行ってその日にしなければいけないことをしていたのです。実は、この長男の選択の中に私たちは三つの間違っただけの選択を見るのです。

1. 動機が間違っている

確かに、長男は父に仕えていました。一生懸命畑で働いていました。しかし、彼はその動機が間違っていたのです。29節を見てください。「長年の間、私はおとうさんに仕え、」というこの「仕え」ということばは「奴隷として仕えた」という意味なのです。つまり、親子でありながらこの長男は「私はあなたの奴隷です」と、そのようにしか考えていなかったのです。ですから、畑で働いていたその働きは、父に対して愛をもって感謝をもって為していたのではないということが明らかです。「私はあなたの奴隷です」と、彼はただの義務感でその働きをしていたのです。私たちも気を付けなければいけません。当初は、神を愛するゆえにしていた働きも、いつの間にかその愛が薄れてしまって、ただの義務感で為しているということが私たちの生活にないかどうかをしっかりと吟味しなければいけません。父なる神を愛するがゆえに為しているか、それとも、しなければいけないと言われるからしていることなのか、自分の為していることは主に対する愛と感謝の思いから出て来ているものかどうかと…。

2. 目的が間違っていた

というのは、父はこんなに喜んでいのに、彼は父の喜びを自分の喜びとすることができなかったのです。最初に見たように、パリサイ人や律法学者たちはイエスが為しておられるその行為を見て喜ぶことができなかった。同じように、主がいったい何を喜ばれるのかそのことが分かっていない、そのような人のことです。長男は分かっていないのです。父親がこんなに喜んでい、その理由を聞いても彼は喜ばなかったのです。つまり、この長男はお父さんを喜ばせること、そのことを目的に生きていなかったのです。私たち信仰者も気をつけなければいけないことは、先ほどの動機とよく似ていますが、私たちは主を喜ばせることが私たちにとっての一番の喜びであるかどうかを考えなければいけないということです。本来なら、長男はこのように自分の父親が恵み豊かで、あわれみ豊かな方であることをともに喜ぶはずですが、父が喜んでいのですから自分がどう思うかではないのです。父がこんなに喜んでい、のを見て「感謝ですね。良かったです、すばらしいですね。」といっしょに喜ぶことをしなかったのです。

信仰者の皆さん、兄弟姉妹の皆さん、神が喜ばれることをあなたは自分の喜びにしていますか？あなたは日々の生活において、これをもって神を喜ばせることができるかどうか、このような考えをもつことは神を喜ばせることかどうか、そのようなことを考えながら選択していますか？それとも「私のやりたいことをします。私の好きなように生きて行きます。私の望み通りに生きて行きます。」と、そのような生き方をして、何が神に喜ばれることかなど考えずに生きていませんか？主を喜ばせることがあなたにとっての最高の喜びであるかどうかです。この長男は自分の考えていたことと違うことが起こったと

きに、それを喜べなかったのです。もし、彼がお父さんを喜ばせることを目標にしていたなら、お父さんの喜びを見てそのことを喜んだはずです。Ⅱテモテ2：4にはこのように記されています。「**兵役についていながら、日常生活のことに掛かり合っている者はだれもありません。それは徴募した者を喜ばせるためです。**」。クリスチャンの皆さん、兄弟姉妹の皆さん、あなたが罪から救い出されたのは、あなたが救ってくださったこの神を喜ばせるように生きるためにです。私たちが生きているのはこの神を喜ばせるためです。それが神の栄光を現わす生き方です。それが神のみこころに沿った生き方なのです。あなたの考えること、あなたの為すこと、そのすべてが父なる神を、主なるイエス・キリストを喜ばせているなら、あなたは間違いなく神の栄光を現わしているのです。そのために私たちは生まれ変わり、そのために生かされているのです。だから、私たちが考えなければいけないことは、本当に私は神に喜んでいただきたいそのことだけを一心に考えて選択しているかどうかです。

悲しいことに、この長男はそのようなことは考えていませんでした。自分の思い通りではなかったから彼は不機嫌になりました。この父親に対して怒りを持ちました。「私のためには何もしてくれないのに、この弟のためにはこんなにするなんて…」と、彼がいかに利己的であるかが見えます。自分のことしか見ていないのです。父を喜ばせることなど考えていないのです。

3. 特権を忘れている

彼は自分に与えられているすばらしい特権を忘れているのです。31節『**おまえはいつも私と一緒にいる。私のものは、全部おまえのものだ。**』、私たち信仰者も人と自分を比較して、あの人はあるもっている、自分はもっていないと見始めると、神に対して不満を抱き始めます。なぜあの人ばかり…と。私たち信仰者が覚えなければならぬことは、いかにすばらしい祝福をすでにいただいているのかということです。私たちが神によってすばらしい祝福をもうすでにいただいているのです。神があなたにくださったこのみことばを通しての約束を忘れていないかどうかです。私たちがこの地上においてもそうですし、永遠においても神の祝福をいただいて生きる者とされているのです。そのことを忘れていないかどうかです。

最後に、この長男の選択を見る時に、何となく、そこに私たちの姿を見るような気がしませんか？礼拝に来ている、でも、正しい動機でないかもしれません。奉仕をしている、でも、正しい動機をもってしてないかもしれない。祈りをささげている、でも、正しい動機でないかもしれない。宣教の働きをしている、でも、正しい動機でやっていないかもしれない…。神が私たちに望んでいることは、正しい動機で為すことです。私たちがすべてのことを神に対する感謝から為すべきです。神の恵みに対して、その神を愛するがゆえにすべてのことを為すべきです。もし、その思いがなければ私たちのどこかに罪が存在しています。すべてのことを神に喜んでいただきたい、そういう思いをもって為しておられますか？こうしてあなたが集まって来た礼拝も神に喜んでいただきたい、神を愛するから、神を崇めたいからと、そのような思いをもって集まって来られましたか？

あなたがしておられる奉仕も、神が私たちにこのような恵みをくださったその感謝です。「神さま、あなたに喜んでいただきたい、それが私の喜びです。もっとあなたに仕えたい。」とそのような思いをもってしておられますか？私たちが考えなければいけないことは、私たちが為すことすべてが神への愛から出ているかどうかです。主なる神が喜んでくださることを願いながら行っているかどうかです。もし、そうでないなら皆さん、今、神の前にその罪を悔い改めて赦しをいただくことです。感謝なことは、このような自分勝手な長男に対しても、父はどうしたかという、28節「**それで、父が出て来て、いろいろなだめてみた。**」と、赦しがあるのです。私たちが神の前に出て行くなら、神は赦してくれるのです。ただ大切なことは、もし、あなたが間違った動機をもって、間違った目的をもって歩んでいるなら、それを悔い改めて正しい歩みをすることです。それを放っておくなら、大変無駄な時間を過ごすことになってしまいます。

最後に、父はこのようなことを長男に言いました。32節「**だがおまえの弟は、死んでいたのが生き返って来たのだ。いなくなっていたのが見つかったのだから、楽しんで喜ぶのは当然ではないか。』**」、「**当然ではないか**」と、これは「それは必要であった、必要である」と訳せることばです。つまり、それが父なる神のおこころなのです。父なる神は一人の罪人が悔い改めて救いに至ることをどれ程望んでおられるかということです。皆さんの愛する方や、皆さんが知っておられる方たちが、この神を知らずに滅びに向かっていること、神はその人たちが救いに至ることをどれ程望んでおられるかです。神はあなたの愛する者たちが永遠の地獄に行くことを望んではいないのです。そして、彼らの救いのためにあなたを救ってくださり、あなたに大切な務めを与えてくれたのです。このすばらしい救いを宣べ伝えるという務めです。

主イエス・キリストが、最初に私たちが見たように、天にお帰りになるときに弟子たちに伝えられたことは「あなたがたはわたしの証人となります。」ということでした。兄弟姉妹の皆さん、あなたはキリストの証人なのです。神はあなたを用いてくださるのです。このすばらしい救いを宣べ伝えるためにあ

なたを救ってくれ、あなたを用いてくださるのです。神の前に場所は関係ありません。なぜなら、私たちの神はグローバル、地球規模の神なのです。神が望んでおられることは、神はすべての罪人が救い至ることを望んでおられるというこの神のおこころを私たちが知って、「主よ、どうぞ私を用いてください。遣わしてください。」と言って証し人として出て行くことです。何処であろうと…。そのときに神はあなたを使って、神のみこころを成してくださるのです。唯一の救いを宣べ伝えるために神はあなたを使ってくださるのです。宣教というのは、私たちに与えられた大きな祝福であり特権です。このキリストの救いのメッセージを人々に伝えるのですから。

問題は、あなたはその働きのために喜んで参加しておられるかどうかです。あなたは傍観者ではありませんか？「我関せず、私にはできない、私には無理だ。他にしなければいけないことがある。」と。使徒の働き 1 : 8 **「しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」**。あなたはキリストの証人として生きておられますか？キリストの証し人としてキリストの福音を伝え続けていますか？兄弟姉妹の皆さん、私たちは目覚めなければいけません。もう、時はないのです。今しかできないのです。しかも、明日のことは私たちに分からないのです。分かっていることは、今日を神が与えてくださっていることです。今日、私を用いてくださることを願うことです。出て行くことです、皆さん。それが大切なのです。出て行って、この語るべきメッセージを語ることです。そして、主のみわざがあなたを通して成されることを期待することです。主はあなたを使ってくださる。神が喜んでくださること、それは私たちが出て行って、このキリストの福音を宣べ伝えることです。神が喜んでくださることを求めながら、それを為す信仰者になることです。神を愛するゆえに、感謝しているゆえにすべてのことを為している、私たちがそのような信仰者に変えられることです。

最後に、神が喜んでくださるそのことを喜びとして私たちは生きて行きましょう。神を喜ばせることを私たちの喜びとして。